

小学校外国語科において、試行錯誤しながら 表現の質を自ら高めようとする児童の育成 —— 1人1台端末を活用した評価や振り返りを通して ——

長期研修員 小林 拓美

《研究の概要》

本研究は、小学校外国語科において、試行錯誤しながら表現の質を高めようとする児童を育成するために、1人1台端末を活用した評価や振り返りの有効性を明らかにしたものである。

単元を通して、1人1台端末を活用した指導者や友達からの評価を基に振り返りを行うことにより、自分のよさと課題を確認し、課題解決方法を決定し、ねらいの達成に向けて試行錯誤しながら表現の質を高めていく。このような活動と修正の一連の流れを繰り返すことにより、表現の質を自ら高めようとすることを示した。

キーワード 【外国語教育 1人1台端末 評価 振り返り 試行錯誤 表現の質】

群馬県総合教育センター

分類記号：G09-01 令和3年度 276集

I 主題設定の理由

新学習指導要領の全面実施に伴い作成された『学習評価の在り方ハンドブック』（文部科学省 令和元年6月）によると、学習評価について「教師が指導の改善を図るとともに、児童生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにする」ことが重要であるとされている。ところが「学習指導と学習評価に対する意識調査 報告書」（文部科学省委託調査 株式会社浜銀総合研究所 2018年1月）によれば、学習状況の評価を「授業改善や個に応じた指導の充実につなげられているか」に対し、「そう思う」と回答した指導者はわずか31.6%、また「小中学校の学習指導に関する調査2020～コロナ禍の中の学校～」（ベネッセ教育総合研究所 2021年3月）によれば、ICTを用いて「一人一人の児童の学習状況に応じた指導を行いたい」と考える指導者は48.3%にとどまった。このことは、これまでの評価が総括的評価に偏っていて、診断的評価及び形成的評価、いわゆる指導に生かす評価が十分できていないことの流れと考えられる。また、今回の学習指導要領の改訂に伴う「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（中央教育審議会 平成31年1月）に「『主体的に学習に取り組む態度』の評価とそれに基づく学習や指導の改善を考える際には、（中略）自らの思考の過程等を客観的に捉える力（いわゆるメタ認知）など、学習に関する自己調整に関わるスキルなどが重視されている」と記載されている。

このように、評価と一体的に学習を進めることが指導者及び学習者両者にとって、今後更に必須となり、どのようにすれば効果的・効率的な評価を、指導者は次なる指導に、学習者は次なる学習に生かせるかを探っていく必要がある。

「学習指導と学習評価に対する意識調査 報告書」によると、学習評価に負担を感じているという指導者が多いという結果が出ている。テストやワークシート、レポートや作文、発表やノート等を評価の材料として収集している指導者が多い中で、その収集に負担を感じている指導者が66.1%という結果であった。反面「教員の負担軽減に配慮した学習評価の充実のために何が有効か」の問いに対し「観点別学習状況の評価や「評定」の算出等の処理に ICTを活用できるよう、校務支援システムを導入する」に92.1%の指導者が回答していた。1人1台の端末が導入されることで、評価に必要な材料が端末内に一括保存できること、これまで指導者が感じていた収集作業の負担が解消されること、収集に費やしていた時間や労力を個に応じた評価や指導に費やせるようになること等が考えられる。

研究協力校では、学習意欲の低下の懸念を解消し、児童の取組の様子や変容が分かるように振り返りの時間を確保している。しかし、その振り返りを指導の改善に生かすまでには至っていない。

これらのことから、1人1台端末を活用し、授業で作成した児童の作品や音声、動画などのデータを蓄積し、これまでのように時間や労力をあまりかけずに評価することにより、指導者が指導の改善の面で仕事の効率化を図り、より充実した評価と個に応じた指導ができる。そうすることで、学習者は評価や振り返りを自らの次なる学習に生かし、ねらいの達成に向けて試行錯誤しながら表現の質を自ら高めようとすると考え、本テーマを設定した。

II 研究のねらい

小学校外国語科において、試行錯誤しながら表現の質を自ら高めようとする児童を育成するために、1人1台端末を活用した評価や振り返りの有効性を明らかにする。

III 研究仮説（見通し）

小学校外国語科において、1人1台端末を活用して評価や振り返りを行うことによって、児童は表現の質を自ら高めようとするであろう。

IV 研究の内容

1 文言の定義

(1) 「表現の質」とは

聞き手がより分かりやすく理解できるような話し手の内容や英語表現及び話し方の質のこと。

(2) 「試行錯誤しながら自ら高めようとする」とは

単元の課題を解決するために行った言語活動に対しての1人1台端末を活用した様々な評価を基に、自己を振り返り、どのようにすればよりよく課題が解決されるかを思考したり、どのような方法を取れば解決に近付けるかを判断したりするなど、自己調整しながら表現の質を高めようとする、以下のような姿のことである。

- ① 端末を用いた友達や指導者からの評価を素直に受容する姿。
- ② 友達や指導者による評価から、表現の質についての自分のよさや課題を確認する姿。
- ③ どのようにすれば自分の課題を解決できるか、端末を通して友達と比較したり、分からないことを質問したりしながら、課題解決の方法を考える姿。
- ④ 自分の課題を解決するために、指導者が作成し、端末に納めた以下のような教材等から、自ら学習を選択し、個別に学ぶ姿。

ア リスニングボックス（聞き取りチェックができる動画集）

イ スピーキングボックス（単語発音、基本文発音、会話のモデル音声集）

ウ ライティングボックス（アルファベットチェック、単語や短文の書き写しモデル）

エ 共有ボックス（学習内容に関連した画像や動画集）

オ 評価・振り返りボックス（自己評価と自由記述収納箱）

カ 個人ボックス（自分で使いたいモデル等を入れる収納箱）

- ⑤ 1単位時間を振り返り、課題を解決するための次時の目標を立てる姿。

2 手立ての説明

(1) 「1人1台端末を活用した評価と個に応じた指導」とは

① 即時的な評価と個に応じた指導

授業内に児童が端末を通じて提出した学習成果に対し、指導者が即時的に評価し、課題解決に向けて児童一人一人に応じたアドバイスを端末を通じて即時的に返信すること。

② 学習成果への評価と個に応じた指導

端末に蓄積された児童の学習成果や変容を評価し、児童一人一人に応じて、端末を通じてアドバイスを書いたり音声で伝えたりして返信すること。

③ 児童同士の相互評価

端末の共有機能を用いて児童同士が相互評価をし、よさや改善点を伝え合うこと。

④ 最終学習成果への評価と個に応じた指導

単元の終末に児童が提出した最終学習成果に対しての評価を行い、児童一人一人に応じて、端末を通じてコメントを返信し今後の学習の課題を見付けられるようにすること。

(2) 「1人1台端末を活用した振り返り」とは

① 自分のよさと課題の確認

端末に保存された学習成果物、指導者の評価や児童同士の相互評価を基に振り返り、自分のよさと課題を確認し、次の学習に生かすこと。

② 課題解決方法の決定

端末を用いた指導者の評価や児童同士の相互評価を基に自分の学習方法を振り返り、課題解決に向けた具体的な方法を考え、自分で次の学習の進め方を決めること。

③ 自分の成長の確認

端末に蓄積された学習成果や振り返り、友達や指導者の評価から、児童が自分の成長を常に確認

すること。

④ 新たな課題の発見

端末内の自分の振り返りや学習成果から、これまでの学習を振り返り、新たな課題を見付け、次の単元で更によくする具体的な改善点を捉えること。

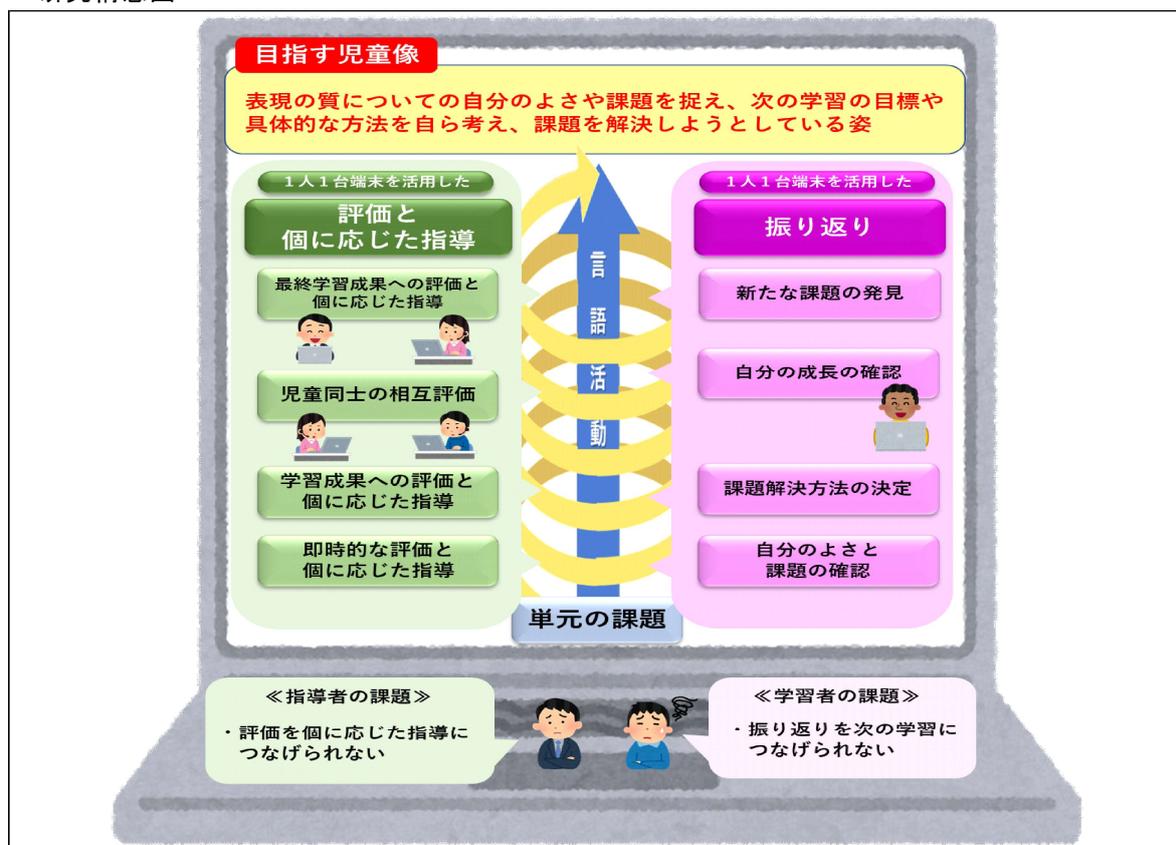
(3) 「1人1台端末の指導者側の活用」とは

- ① 児童自身の個別学習に活用できる資料や材料を準備し、端末に納めておくこと。
- ② 授業中、授業後における評価、変容した児童の姿を評価し、端末を通じて個に応じた指導をすること。
- ③ 端末内の動画や音声、学習成果物などを友達及びクラス全体で活用したり共有したりする場を設けることで、表現の質や学習成果物の質の向上を図るよう促すこと。
- ④ 振り返りや学習成果物などのデータを蓄積し、評価に生かすこと。

(4) 「1人1台端末の学習者側の活用」とは

- ① 指導者が準備した端末内の資料や音声、動画等を活用し、個別に学習を進めること。
- ② 端末を用いた指導者や友達からの評価を基に、よりよい表現になるように試行錯誤しながら表現の質を高めること。
- ③ 端末内の動画や音声、学習成果物を通して自らの学習を振り返り、分からないところを友達と比較したり、指導者や友達に質問したり、試行錯誤しながら表現の質を高めること。
- ④ 振り返りを端末に保存しておき、次の学習に向かう材料にし、いつでも確認できるようにしておくこと。

3 研究構想図



V 研究の計画と方法

1 授業実践の概要

小学校外国語科において、1人1台端末を活用して評価や振り返りを行うことによって、児童が表

現の質を自ら高めようとするか検証する。

対 象	研究協力校 小学校第6学年 36名
実践期間	令和3年10月4日～11月22日 8時間
単 元 名	「We all live on the Earth.」
単元の目標	地球上の生き物の生活環境について考えるために、好きな動物を選び、その生き物の暮らしについて自分の考えや気持ちを入れながら英語で話すことができる。

2 検証計画

検証の観点	検証の方法
小学校外国語科において、1人1台端末を活用して評価や振り返りを行うことは、児童が表現の質を自ら高めようとすることに有効であったか。	端末に納めた学習成果物、振り返り、観察、単元後のアンケート

3 抽出児童

A	外国語の授業に意欲的に取り組み、友達との交流も積極的に行っている。1人1台端末を活用して、友達や指導者からの即時的な評価を基に自ら課題解決のための具体的な学習方法を考え学習させたい。そして、次時の目標を立てながら、表現の質を高めさせたい。
B	外国語の授業に意欲的に取り組むが、友達と交流する場面では躊躇してしまうことが多い。1人1台端末を活用して、自分のよさと課題を捉えさせたい。そして、友達の学習成果と比較しながら課題解決のための具体的な方法を考え、表現の質を高めさせたい。
C	外国語の授業に苦手意識があり、活動に取り組もうとするがすぐ諦めてしまう。1人1台端末を活用して、自分のよさを捉え、英語への抵抗感を減らしたい。また、課題を認識させ、解決するために自ら学習を選択し、個別学習できるようにしたい。

4 評価規準

評価規準	知識・技能	[知識] Where do ~live?, ~ live in ..., What do ~ eat?, ~eat ... 及びその関連語句などについて理解している。 [技能] 地球上の生き物について、上記の表現などを用いて自分の考えや気持ちを入れながら、英語で話す技能を身に付けている。
	思考・判断・表現	地球上の生き物の生活環境について考えるために、好きな動物を選び、その生き物の暮らしについて、上記の表現などを用いて自分の考えや気持ちを入れながら、英語で話している。
	主体的に学習に取り組む態度	地球上の生き物の生活環境について考えるために、好きな動物を選び、その生き物の暮らしについて、上記の表現などを用いて自分の考えや気持ちを入れながら、英語で話そうとしている。

5 指導計画

過程	時程	○ねらい めあて	評価の観点			☆記録に残す 評価項目(方法) ●指導改善の視点	主な1人1台端末の活用法 [参考:報告書IV 研究の内容2(3)(4)]	
			知	思	態		指導者側から	児童側から
つ	第1時	○地球上の生き物がどこで暮らし、何を食べているのかなどについてのやり取りを聞く活動を通し				●やり取りの概要を理解できない児童には音源の再生スピードを調節して、ゆっくり聞かせる。	○地球上の生き物について、易しいものから難しい内容まで5種類(レベル1～5)の音源を端	○レベル1から順に聞き、内容が捉えられたら次のレベルへ進む。 [①]

つ か む	第 1 時	て、その概要を 理解できるよう にする。			末に納めておく。 [①] ○振り返りや学習 成果物などのデ ータを蓄積し、 評価に生かす。 以後、毎時間行 う。 [④]	○振り返りを端末 に保存しておき 次の学習に向か う材料にし、い つでも確認でき るようにする。 以後、毎時間行 う。 [④]
		[本時のめあて] 地球上の生き 物がどこで暮ら し、何を食べて いるのかなどに ついて聞き取る う。				
単元の課題 地球上の生き物の暮らす環境について、自分の考えや気持ちを入れて英語で発表しよう。						
追 究 す	第 2 時	○地球上の生き物 がどこで暮らし ているのか英語 で伝え合うこと ができる。		☆Where do ~live? , ~live in ... 及びそ の関連語句などにつ いて理解している。 〈観察、動画〉 ☆地球上の生き物につ いて、本時のねらい とする表現などを用 いて英語で話す技能 を身に付けている。 〈観察・動画〉 ●やり取りの難しい児 童には、端末内の音 声モデルを繰り返し 聞くよう声を掛ける。	○生き物や自然に 関する表現など の音声や動画を 端末に納めてお く。 [①] ○児童の授業中の 活動に対して端 末を通じて即時 的に評価し、個 に応じた指導を することで、表 現の質を高めさ せる。 [②] ○やり取りした動 画を共有し、友 達のものと比較 させることで、 表現の質を高め させる。 [③]	○端末に納められ た音声や動画を 使って発音や表 現の仕方を個別 に学ぶ。 [①] ○やり取りの動画 に対する指導者 や友達からの評 価を基に、より よい表現になる ように試行錯誤 しながら表現の 質を高めようと する。 [②] ○端末を活用して 動画を共有する ことによって、 友達のものと同 じく、試行錯誤 しながら表現の 質を高めようと する。 [③]
		[本時のめあて] 地球上の生き 物がどこで暮ら しているのか英 語で伝え合おう。				
る	第 3 時	○地球上の生き物 が食べているも のについて英語 で伝え合うこと ができる。		☆What do ~ eat? , ~eat ... 及びその関 連語句などについて 理解している。 〈観察、動画〉 ☆地球上の生き物につ いて、本時のねらい とする表現などを用 いて英語で話す技能 を身に付けている。 〈観察・動画〉	○個別に単語の発 音を確認できる ように端末に音 声を納めておく。 [①] ○児童の授業中の 活動に対して端 末を通じて即時 的に評価し、個 に応じた指導を することで、表	○端末に納められ た音声や動画を 使って発音や表 現の仕方を個別 に学ぶ。 [①] ○やり取りの動画 に対する指導者 や友達からの評 価を基に、より よい表現になる ように試行錯誤
		[本時のめあて] 地球上の生き 物が食べている ものについて英 語で伝え合おう。				

追 3 時			●やり取りの難しい児童には、端末内の音声モデルを繰り返し聞くよう声を掛ける。	現の質を高めさせる。 [②] ○やり取りした動画を共有し、友達のものと比較させることで、表現の質を高めさせる。 [③]	しながら表現の質を高めようとする。 [②] ○端末を活用して動画を共有することによって、友達のものと比較し、試行錯誤しながら表現の質を高めようとする。 [③]
	究 す 第 4 時	○地球上の生き物の食物連鎖について英語で伝え合うことができる。 [本時のめあて] 地球上の生き物の食物連鎖について英語で伝え合おう。	○ ○	☆What do ~ eat? , ~eat … 及びその関連語句などについて理解している。 〈観察、動画〉 ☆地球上の生き物の食物連鎖について、本時のねらいとする表現を用いて英語で話す技能を身に付けている。 〈観察、動画〉 ☆地球上の生き物の食物連鎖の関係を本時のねらいとする表現などを用いて英語で話している。 〈観察・動画〉 ●やり取りの難しい児童には、端末内の音声モデルを繰り返し聞くよう声を掛ける。	○児童の授業中の活動に対して端末を通じて即時的に評価し、個に応じた指導をすることで、表現の質を高めさせる。 [②]
ま 第 と 5 め 時 る	○好きな動物の食物連鎖について、ピラミッドチャートを活用して発表内容を考えることができる。 [本時のめあて] 好きな動物の食物連鎖について、ピラミッドチャートを使って発表内容を考えよう。		●食物連鎖の関係を捉えにくい児童には、端末内の友達の発表内容を参考にさせる。	○端末に生き物の画像を納めておき、食物連鎖の関係を表すための画像に活用できるようにする。 [①] ○作成したピラミッドチャートを共有し、友達のものと比較させることで、発表内容の質を高めさせる。 [③]	○好きな動物の食物連鎖の関係を表すための画像は端末内のものを活用する。 [①] ○端末を活用してピラミッドチャートを共有することにより、友達と比較し合ったり分からないところを指導者

ま と め る	第 6 時	<p>○好きな動物の食物連鎖について、ピラミッドチャートを基に発表方法を考えることができる。</p> <p>[本時のめあて] 好きな動物の食物連鎖について、発表方法を考えよう。</p>		<p>●発表方法を思いつかない児童には、端末内のモデルを提示したり、友達の方法を参考にさせたりする。</p>	<p>○端末に生き物の画像を納めておき、食物連鎖の関係を表すための画像に活用できるようにする。 [①]</p>	<p>や友達に質問したりし、発表内容の質を高めようとする。[③]</p> <p>○好きな動物の食物連鎖の関係を表すための画像は端末内のものを活用する。 [①]</p>
	第 7 時	<p>○好きな動物の食物連鎖について、自分の考えや気持ちを入れながら英語で話そうとしている。</p> <p>[本時のめあて] 好きな動物の食物連鎖について、自分の考えや気持ちを入れて英語で話そう。</p>	○ ○	<p>☆地球上の生き物の生活環境について考えるために、好きな動物の暮らしについて既習の表現などを用いて自分の考えや気持ちを入れながら英語で話している。 〈観察・動画〉</p> <p>☆地球上の生き物の生活環境について考えるために、好きな動物の暮らしについて既習の表現などを用いて自分の考えや気持ちを入れながら英語で話そうとしている。 〈観察〉</p> <p>●自分の考えや気持ちを入れられない児童には、端末内のモデルを参考にさせる。</p>	<p>○児童の授業中の活動に対して端末を通じて即時的に評価し、個に応じた指導をすることで、表現の質を高めさせる。 [②]</p> <p>○作成した発表資料を共有し、友達のものと比較させることで、発表内容の質を高めさせる。 [③]</p>	<p>○やり取りの動画に対する指導者や友達からの評価を基に、よりよい表現になるように試行錯誤しながら表現の質を高めようとする。 [②]</p> <p>○端末を活用して発表資料を共有することにより友達と比較し合ったり分からないところを指導者や友達に質問したりし、発表内容の質を高めようとする。 [③]</p>
	第 8 時	<p>○地球上の生き物の生活環境について考えるために、好きな動物の暮らしについて、既習の表現などを用いて自分の考えや気持ち</p>	○ ○	<p>☆地球上の生き物の生活環境について考えるために、好きな動物の暮らしについて既習の表現などを用いて自分の考えや気持ちを入れながら英語で話している。</p>	<p>○端末を活用した相互評価を基に自分の発表内容を振り返り、よりよい表現になるように個に応じた指導を行い表現の質を高め</p>	<p>○発表内容に対する友達からの評価を基に、よりよい表現になるように試行錯誤しながら表現の質を高めようとする。 [②]</p>

ま と め る	第 8 時	ちを入れながら英語で話している。	〈観察・動画〉 ☆地球上の生き物の生活環境について考えるために、好きな動物の暮らしについて既習の表現などを用いて自分の考えや気持ちを入れながら英語で話そうとしている。 〈観察〉	させる。 [②]
		[本時のめあて] 地球上の生き物の暮らし環境について、自分の考えや気持ちを入れて英語で発表しよう。	●即時的な相互評価を行うことで、その評価を基に自分を振り返らせ、表現の質を高めさせる。	

VI 研究の結果と考察

小学校外国語科において、1人1台端末を活用して評価や振り返りを行うことは、児童が表現の質を自ら高めようとすることに有効であったか。

1 1人1台端末を活用した評価について

(1) 結果

① 即時的な評価と個に応じた指導

授業の導入では、図1のように端末を活用して、地球上の生き物についての会話の聞き取りを個別に行った。会話の内容は易しいものから難しい内容まで5種類のレベルを準備し、指導者があらかじめ動画を作成し、端末に納めた。児童が自分のペースで順を追って聞き取る活動ができるよう、丸をもらった次のレベルへと進むようにした。また、第4時の食物連鎖の関係性を捉える学習をする際の食物連鎖クイズも、レベル別に準備し、図2のように即時的に丸を付けてもらったり、コメントをもらったりすることで、児童は今までより早く指導者からの個に応じた指導を受け、表現の質を自ら高めようと課題に取り組んでいた。食物連鎖クイズでは、食物連鎖の関係性の英語表現を録音して指導者へ送信させたところ、表現が曖昧で自信のない



図1 レベル別の会話の聞き取り

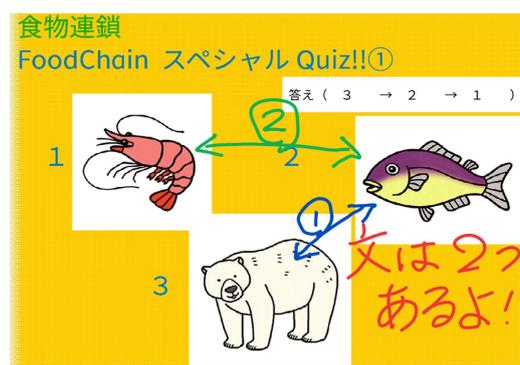


図2 食物連鎖クイズ

児童は、友達に確認しながら録音していた。授業後のアンケートには、すぐ確認してもらえることで「時間の無駄がなくてよい」「正解か間違いかがすぐ分かってよい」などと回答し、自分の正誤がすぐ分かったり、間違いを正せたことに83%の児童が満足していた。しかし、指導者が児童から送信されたものを確認することに集中してしまうこともあり、児童の活動の様子を見逃してしまうことや、返信が遅くなってしまうこともあった。「もっと早く返信してほしい」「次の課題に早く取り組みたい」などと回答する児童も17%いたことから、指導者側の改善は必要なものの、児童が次の学習に早く取り組みたいと意欲を示していたことが分かる。

② 学習成果への評価と個に応じた指導

図3のような、英語でのやり取りの動画や発表資料などを送信させ、その動画に丸を付けたりコメントを添えたりして返却した。すると児童は「次の時間に、もう一度録画し直したい」「友達のよいところを真似して自分の資料を作り直したい」など、表現の質を自ら高めようという意欲を見せた。

また図4のように端末を活用して会話のやり取りや発表資料の途中経過を共有した。そして、この中から内容や表現がよくできている児童を抽出し、学級全体で共有した(図5)。その結果、WhereとWhatの使い分けを理解しきれずに混同して表現していた児童が「間違えて使っていた。何を食べているのかを質問するときは、Whatだ」と気付くことができた。さらに児童は、手元の端末の画面で図4と同様の画面を開くことができ、聞きたい友達の作品を見て自分のものと比較することができる。その結果、抽出児童Aは「迷ったときは、友達のを参考にすればよい」と課題解決の方法を見付けていた。評価を基に、自ら課題を見付け、課題解決の方法を考えるきっかけとなっていたことが分かる。また、抽出児童Bは「友達の作ったものを参考にできたからよかった。アイデアをもらうことができた」と答えた。友達と自分の資料を比較しながら、よりよい資料にするために、試行錯誤しながら学習に取り組んでいたことが分かる。一方、抽出児童Cは「自分だけではなく他の人のも見られてよかった」と答えた。友達の発表資料を見ることで自分のよいところを確認できたため、英語への抵抗感が減り、自信をもって諦めず最後まで作り上げることができたと考える。

このように抽出児童も含め、89%の児童が参考にできてよかったと回答していた。しかし「自分の方が下手だと思った」「自分の顔が写っているのが嫌だ」「共有するのではなく、実際にみんなの前で言う方がいい」と、共有の仕方の工夫が必要だという内容の回答をしていた児童も11%いた。

このように抽出児童も含め、89%の児童が参考にできてよかったと回答していた。しかし「自分の方が下手だと思った」「自分の顔が写っているのが嫌だ」「共有するのではなく、実際にみんなの前で言う方がいい」と、共有の仕方の工夫が必要だという内容の回答をしていた児童も11%いた。

③ 児童同士の相互評価

第8時の「好きな動物の生活環境」を発表し合う場面でを行った。端末のアンケート機能を活用したもので、図6のように即時的に相手に評価を伝えることで、表現の質の向上をねらったものである。これまでの発表と異なり、端末内のアンケート機能を使うことにより、自分の発表に対する評価が友達から即時的に送信されてくるので児童は「自分がどのような発表をしているのか分かった」「評価されると間違いが分かってよい」と97%の児童がこの活動を好意的に受け止めている。友達の言っていることを真剣に聞き、称賛し合ったり、間違いを指摘し合ったりしていた。指摘された児童は即時的に間違いを正したり、表現の質を高めたりすることができた。相互評価前後の発表内容を比較してみたところ、自分の考えや気持ちに加わるなどの内容の質が向上した児童は28%、WhereやWhatの使い分けや動物名詞を複数にするなどの正誤に関して、英語の表現が向上した児童は25%、ジェ



図3 学習成果への評価と個に応じた指導



図4 自分の学習を振り返るための全体共有



図5 表現の確認のための共有

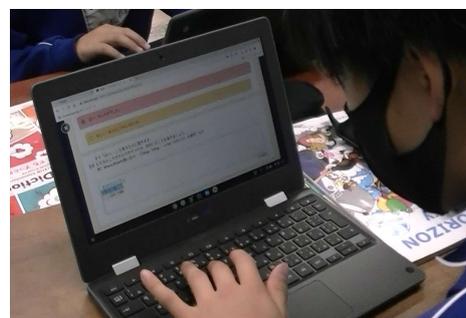


図6 児童同士の相互評価

ジェ

スチャーを付けたり表情が豊かになったりなどの態度面が向上した児童は19%だった。相互評価を行った結果、内容面、表現面、態度面のいずれかにおいて、72%の児童が表現の質を高めたことになった。変化がなかった児童は、相互評価前から自分の考えや気持ちが入っており、スムーズに言えていた児童であった。抽出児童には以下の表1のような変化が見られた。

表1 抽出児童の相互評価後の変化

A	相互評価前から自分の考えや気持ちを入れて発表することができていた。さらに「すらすら言えていて聞き取りやすかった。ジェスチャーがつくといいと思う」と友達からの評価を受け、発表内容とジェスチャーが合っているか確認しながら、ジェスチャーを付けて笑顔で発表しようとしていた。
B	自然環境問題の内容が分かる発表資料を作って臨んでいた。友達から「しっかり自分の考えを入れていいね」と評価されたことで自信をもつことができた。しかし、「食べているものを質問するときはWhereでなく、Whatだよ」と指摘されたことで、間違いに気付くすぐに修正し、表現の質を高めることができた。
C	英語を話すことに苦手意識があったが、友達から「動物にsがついているね」「聞いている人の方を見ていいね」「ジェスチャーもついているね」と評価されたことで、自分のよさを捉えることができていた。そのため、英語への抵抗感が減り、自信をもって相手の目を見て、スムーズに言えるようになった。

抽出児童Aは、相互評価前から友達と相談しながら自分の考えや気持ちを入れることができていたため、表現や内容については変化がなかった。しかし、友達からの評価を受けた後、発表態度をよくしようとする姿が見られた。抽出児童Bは、自分のよさを確認できたことで自信が付き、課題を把握することによって表現の質を高めようとしていた。抽出児童Cは、友達から頑張りを認めてもらえる即時的な評価を受け、自分のよさを確認できたことで、更に発表をよくするための方法を考えようとしていた。

④ 最終学習成果への評価と個に応じた指導

学習成果物や振り返りシートを端末に保存しておくことによって、いつでも児童の学習の様子や成果を評価したり、個に応じた指導をしたりすることができた。児童から送信された発表練習動画を指導者が確認し、内容の充実を図るようにアドバイスをした。その指導者からの評価と児童同士の相互評価を経て、図7のように下線部分が増え最終発表では発表内容の質が向上した。そのため送信されてきた最終学習成果に、成長の様子をコメントにして返信した(図8)。児童はその最終学習成果へのコメントを読んで「自分の考えを入れて発表できたのでGoodがもらえた。次は、もっと自分の考えを入れていきたい」と次の学習への課題を捉えるとともに意欲を高めることができた。

<発表前の内容>

Where do sharks live? Sharks live in the sea. What do sharks eat? Sharks eat dolphins.

<最終学習成果>

Where do sharks live? Sharks live in the sea. What do sharks eat? Sharks eat dolphins. Sharks eat plastic. Sad.

図7 発表内容の変化



図8 最終学習成果物への評価

(2) 考察

単元を通して、98%の児童が WhereとWhatを正しく使い分け、95%の児童が環境についての自分の考えや気持ちを入れることができた。このような結果が出たのは、毎時間の発表のやり取りを録画し、即時的な評価と個に応じた指導や相互評価を継続して行ってきたことが有効だったからだと考えられる。端末に保存してあることで、何度も互いに見返すことができ、内容、表現及び話し方について、友達同士アドバイスし合うことができ

たからである。また、指導者の即時的な評価と個に応じた指導があったため、発音や英語表現の間違いを直すことができ、繰り返し英語表現を言うことで身に付いたのだと考えられる。そのため、端末を活用した録画機能は大変有効であったと言える。さらに、学習成果への肯定的な評価やコメントがあるため、自分がどう評価されているのかを理解し、言い方を確認したり、コメントを読んで次の録画や学習に生かしたりする姿が見られたのも、表現の質を自ら高めようとする姿が態度として表れているのだと考えられる。

また、この単元で、児童同士の相互評価を取り入れたことは、自分の英語の内容や表現、態度面で質の向上を図るための効果的な方法だと言える。発表者側は今まで以上に端末を手にしながらかかりやすく、資料を活用して発表することができた。また、聞き手側も端末の資料を見ながら聞くため、何を言っているのか聞きやすく、評価しやすかったようである。72%の児童が表現の質を高められたことは、継続的に評価と個に応じた指導を行ったことが有効であったと考えられる。

今後の授業でも、言語活動の時間を十分に確保できるように、授業の時間配分を考え、ALTと協力し、児童の様子を見ながら学習成果の確認をすることが必要である。

2 1人1台端末を活用した振り返りについて

(1) 結果

① 自分のよさと課題の確認

児童は、毎時間やり取りの動画、発表資料を端末を通して送信し、指導者から評価や個に応じた指導を受けたり友達と相互評価を行ったりした結果、自分のよさと課題を確認することができた。それらを基に、次の学習ではどんなことをすればよいのか振り返りを通して、目標や具体的な方法を考え、課題解決へと自ら試行錯誤する姿が見られた。

② 課題解決方法の決定

自分のよさや課題を確認すると、児童はすぐ自分の課題を解決しようとしていた。英単語や英語表現が分からないとき、図9のように、自分で確認したいことを端末内のスピーキングボックスを活用し、自分に必要な単語や英語表現を何回も繰り返し聞いている姿が見られた。こういった個別学習について「すぐ確認できてよかった」「分からない英語をほうっておくことがなくなった」という児童が多く、英単語の発音や英語表現が曖昧である



図9 発音の確認

という課題を解決できたことで、自分のよさや成長を感じている児童が多いことが分かった。また常に個別学習を選択するわけではなくペア学習しているときには、分からないことを隣にいる友達に質問したり近くにいた指導者に質問したりもしていた。その場に応じて課題を解決する方法を選んでいることも分かった。抽出児童が課題解決の方法を決定した様子は以下の表2のようである。

表2 抽出児童の課題解決の方法を決定した様子

A	友達から「すらすら言えていて素晴らしいね。ただ、発音をもっとよくなるとよいと思う」という評価を基に、発音練習するために端末内の表現モデルを聞こうとしていた。
B	友達から「これは“shrimp”だよ」と教えてもらったが、その後、自信がつくまで端末を活用し、正確な発音を確認しようとしていた。
C	分からない単語が出てきた時に、近くにいる友達に聞こうとしていたが、端末を活用すれば自分で確認できることに気づき、分からない単語を一つ一つ確認しようとしていた。

いずれの抽出児童もスピーキングボックスは個別学習を進める上で必要な教材であると言っている。抽出児童Aは、発音や表現が間違っても即時的な個に応じた指導を受けることによって、正しい発音や表現の仕方を学習成果につなげ、表現の質を高めることにつながっていた。抽出児童Bは、分からない単語があってもすぐ正しい発音や表現を聞ける教材があることで、課題解決しながら学習を進めることができた。抽出児童Cは、諦めずに単語の発音を繰り返し聞き、単元の最後には正しく発音できるようになっており、自ら解決するための学習を選択し、個別学習できた。

③ 自分の成長の確認

自分のよさと課題を捉えながら、課題を解決するために端末を通じた録画や確認を繰り返すことで、Whereも Whatも上手に使えるようになり、自分の成長を感じることができた。図10のように、友達からも頑張りを認めてもらえることで、「嬉しい。何回も端末のモデルを確認しながら言う練習をしてよかった」と達成感を感じている様子が見られた。そのため、学習への意欲がさらに高まり、表現の質を自ら高めようとする姿が見られた。



図10 自分の成長の確認

④ 新たな課題の発見

端末を活用した学習を積み重ね、自分の学習の成果を振り返ることで、自分がどのように学習を行ったのかを確認することができた。そして、自分の成長を確認するとともに、児童は、次の授業への新たな課題を発見することができた。図11の児童の振り返りでは「生き物の暮らしについて言えるようになったけれど、自分の考えや気持ちを入れた方がよいな」と、次の単元の目標を捉える記述が見られた。他の児童も「もっとたくさんの友達に評価してもらい、表現の内容も充実させたい」「学習してきた表現をもっと使って英語を話せるようになりたい」などと回答していた。



図11 振り返りから課題を発見する様子

こうしたことから、児童の新たな課題を基に、その課題を解決していけるよう、指導者も指導法を改善する必要がある。

(2) 考察

児童は、毎時間やり取りした動画や振り返りシートを振り返ることで、自分がどの程度学習内容を理解し、どの程度話せるようになっているのか、客観的に捉えることができた。これは、授業の終末で自分の学習成果を見つめ直す時間を設け、次の授業冒頭にどのようなことを頑張りたいかを考える時間を設定してきたからである。また、友達と交流しながら学習を進めることで、学習成果に対する友達からの評価を素直に受け入れ、自分のよさと課題を把握することができた。課題が見付かると、学習に対する意欲が高まり、児童はよりよい表現にしようと試行錯誤し始める。今回の単元では、指導者があらかじめ個別学習できる教材を作成し、端末に納めていたため、児童は自分で学習方法を考え、課題解決することができた。学習を振り返ることで、「自分自身にとって発音を聞くことが必要なのか」「英語表現を練り直すことが必要なのか」「やり取りを録画し直すことが必要なのか」など、課題解決に向かって試行錯誤することができた。そのため、個別学習できる教材を端末に納めたことはとても有効な手段だったと考えられる。その結果、児童は自分に必要な学習方法を選び、表現の質の向上を図ることができたと言える。

また、やり取りの動画を保存し蓄積していくことで、児童はいつでも自分の変容を見ることができた。実際に単元の初めの英語表現と単元最後の英語表現を聞き比べてみると明らかに発表後の方がスムーズで自分の言葉で言っているようであった。これは単元を通して、録画したものを見返しては、自分の成長を確認し、それを繰り返すことで達成感を味わうことができ、表現の質の向上を目指そうと取り組んでいたからだと言える。

一方、指導者も振り返りや学習成果物をデータで保存し蓄積しておくことによって、授業内では気付かなかった児童のつまずきに気付くことができるので、次時の授業での指導に生かすことができた。そして、これらのデータを基に単元を通じた総括的評価につなげることができると言える。

Ⅶ 研究のまとめ

1 成果

小学校外国語科において、1人1台端末を活用して評価や振り返りを行うことは、児童が表現の質を自ら高めようとすることに有効であった。

- (1) 1人1台端末を活用した評価を行うことで、指導者や友達からの評価と個に応じた指導を基に児童が自分のよさや課題、成長を確認することができた。そして、その学習の課題を解決するために、自ら学習方法を選択し、解決することを繰り返すことで、81%の児童が表現の質を高めようとする態度を育むことができ、72%の児童が英語表現の質を高めることができた。
- (2) 1人1台端末を活用した振り返りを行うことで、児童が自ら作成資料や会話のやり取りの内容をよりよい表現にしたり、相手意識をもってより伝わるように工夫したりすることができた。自分のよさや課題を確認することで、次の学習方法を探りながら課題を解決しようとする態度を育むことができた。その結果、英語を使い、積極的に友達とやり取りするようになった。
- (3) 1人1台端末を指導者及び学習者が活用することで、指導者は学びの場を提供し、児童は課題解決に向け自分に合った学びを決定し、学習することができた。端末で録画したものや学習成果物を共有することで、友達と比較したり質問したりするといった、試行錯誤をしながら表現の質を高めようとする態度を育成することができたと考える。さらに、児童の学習成果のデータが端末に蓄積されていることで、指導者はそのデータを基に総括的な評価をすることも可能であり、業務の効率化を図ることができると考える。

2 課題

- (1) 評価と個に応じた指導を毎時間行うことで、児童の次なる学習への意欲喚起になった。しかしどのような学習をするか自分で考えられず、指示待ちをしてしまう児童もいた。表現の質を自ら高めようとする態度を育成できるように、個別学習の機会を多く設けたり、個別学習を促す言葉掛けを多くしたりする必要がある。
- (2) 前時の振り返りを授業冒頭に見返す活動を設定したが、読み返すだけの児童もいた。常に自分の課題を捉え、解決方法を考えたり、学習改善したりできるように、ワークシートを工夫するなど、前時の学習とのつながりを明確に意識させることが必要である。

Ⅷ 提言

児童一人一人が、試行錯誤しながら英語を学ぶことができるように、目的に応じて個別に学習する教材を端末内に準備し、指導者は端末を活用した評価を個に応じた指導に生かすことが効果的であると考ええる。また端末を活用した評価や振り返りを次の学習につなげ、表現の質を自ら高めようとする児童を育成することが重要であると考ええる。

<参考文献>

- ・文部科学省 『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説外国語活動・外国語編』
- ・文部科学省 国立教育政策研究所 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』 小学校 外国語・外国語活動（2020）
- ・文部科学省 『外国語の指導におけるICTの活用について』（2020）
- ・群馬県教育委員会 『はばたく群馬の指導プランⅡ』（2019）
- ・太田 洋・阿野 幸一 著 『小学校英語はじめの一步』大修館書店（2019）

<担当指導主事>

永井 直樹 今井 俊介